

春を告げる黄色い花々

2月14日はバレンタインデー。フランスでも商業色が濃い行事だが、花束やチョコレートを贈る楽しい時である。2月2日「聖燭祭」(クリスマスから40日後、イエス・キリストの誕生を告げるために神殿に詣った日)のクレープを食べる頃から今年のパリは暖くなり、2月も中旬になり日が少しずつ延びて春が近くなってきた。



早咲きの桜がつぼみ、黄色い水仙

の花が開き始めた。南仏では青空に輝かしく映える黄色いミモザの花が咲き、マントンでは「レモン祭り」が再開(期間は2月12日から27日までの2週間)された。例年20万を超える人たちが地中海の黄色い春を訪れる。マントンから30km離れたニースでも今年はカーニバルが開催されている(期間は2月11日から27日まで)。コロナ禍で2年連続中止が続いてきた春のイベントがようやく戻ってきた喜びは大きい。フランスの冬休みと重なり多くの人たちに楽しんで欲しいと思う。



写真上は「マントンのレモン祭り」
右はニースの海岸。



フランスの学校制度

フランスは学校を三つのゾーンに分け、
Aゾーン(ブザンソン、ボルドー、クレールモン

フェラン、グルノーブル、リモージュ、リヨン、ポワチエ)、
Bゾーン(エクス・マルセイユ、アミアン、カーン、リール、ナンシー・メッツ、ニース、
オルレアン、ランス、レンヌ、ルーアン、ストラスブール)、
Cゾーン(パリ、クレティユ、モンペリエ、トゥールーズ、ヴェルサイユ)、
冬休み期間はAゾーン: 2月12日から2月28日、Bゾーン: 2月5日から2月21日、Cゾーン: 2月19日から3月7日である。子供達が学校へ行かない冬休みはコロナ禍対策にとっては嬉しい追い風、集団感染を回避できる絶好の機会である。

4回目のブースター接種は行わない

12月末から急激なオミクロン感染拡大が続き、1月には一日の新規感染者が50万人を超えた。その数字もようやく10万を下回り、13日には86000人となった。病院の集中治療室を占めるコロナ重症患者が減り、第5波が終わりに近づいた。2月末には屋外でのマスク着用義務が解除される。新たな変異株が生まれる可能性がないわけではないが、4回目のブースター接種はしないと発表された。

テレワーク優先の在宅勤務からオフィス出勤勤務へと移行し始めている。楽観的かも知れないが、コロナ禍の終息という明るい未来が少し見えてきたように思う。

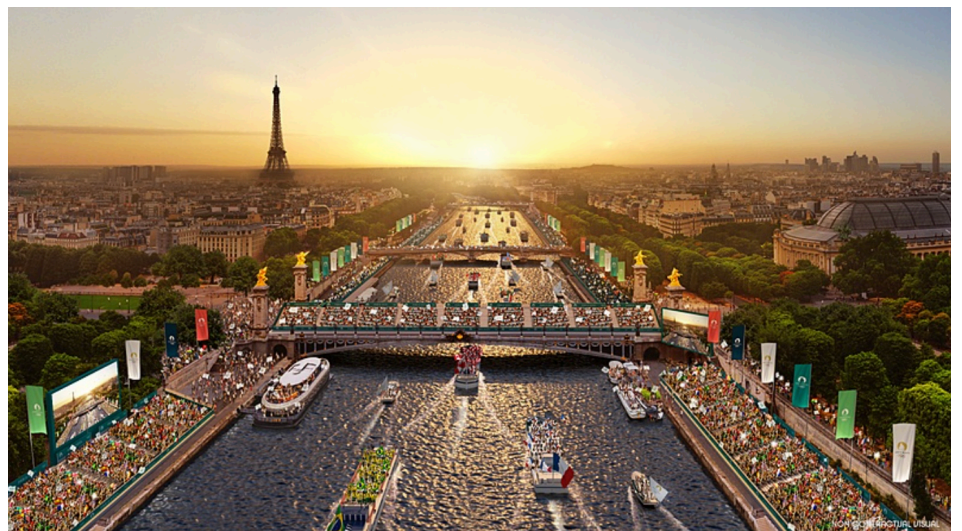
そして、日照時間が短く、曇り空ばかりで明るい日差しに恵まれないパリの冬に疲れ、春を感じる暖かい太陽が輝る日にはどこからともなくそぞろ歩きを楽しむ人が増えてくる。



陽の当たるセーヌ川岸を散歩したり、ジョギングしたりする風景が戻ってきた。セーヌ川の水位も今のところは1,5m前後に安定している。3月上旬まではアジール・フロタン「ルイズ・カトリーヌ」号の安全繋留を最優先にオーステルリッツ駅前の川岸まで往復を続けている。

解決しないセーヌ川の汚染

岸の近くまで行かないと分からないがセーヌ川にはいろいろな物が流れてくる。木の幹や小枝は仕方がないと思うが、ゴミの量が半端ではない。ペットボトル、ビン、缶、プラスチック容器、段ボール箱に詰まった服や布、お弁当箱、生ゴミなどが船と岸の間のスペースに所狭しと溜まっている。



毎回ゴミ拾いが一仕事である。水を吸っているので引き上げるのが大変だ。先日はなんと小型冷蔵庫と牛の死骸が流れ着き、水上保安官に処理していただいた。パリ市内を流れるセーヌ川の水は汚い。日本の清潔感までは望まないが、もう少しゴミを捨てないように心掛けて欲しいと思う。岸にも割れたガラス瓶のかけら、使い捨てたマスク、食べ残りの食品、プラスチックゴミが散乱している。地域活動としてゴミ拾いを始めたところも出てきたが、パリには本当に沢山のゴミが至るところに捨てられている。イダルゴ・パリ市長は2024年夏のパリ・オリンピックでは「トライアスロン」(水泳、自転車ロードレース、長距離走)でセーヌ川を泳ぐと公言している。シラク大統領時代からパリのセーヌ川を泳げる川に戻すと言われ続けてきた。魚もいないことはない。沈んだアジュール・フロタンを浮上させた時には船内に3匹「ナマズ」が棲んでいた。しかし未だに汚水を流しているボートハウスも珍しくないセーヌ川が2年で泳げるまでに回復するのは極めて難しいと思う。泳げないにしても、オリンピックを機にゴミを捨てない清潔なパリになって欲しい。(古賀順子記)

参考記事

パリのセーヌ川で水質改善計画が進行中だ。1923年に市民の遊泳が禁止されてから、ほぼ1世紀。過去にも汚名をすすごうとしたことがあるが、挫折を味わった。2024年のパリ五輪の競泳会場に決まったことで、今度ばかりは後に引けないようだ。パリ市が水質の改善に取り組むのは、実は今回が初めてではない。

パリ市はシラク市長(後の大統領)時代の1984年、「10年後のセーヌ川は、ほぼ澄んだ状態で流れることになる」と断言。シラク氏も90年に、「3年後にきれいなセーヌ川で私が泳ぐ」と公言したが、実現しなかった。

そんなセーヌ川が、2024年のパリ五輪では、トライアスロンや10キロのオープンウォーター(野外の競泳)の会場に決まった。パリのイダルゴ市長は、「泳げるセーヌ川」にすることを市民に約束。24年に向けた行動計画を練っている。

五輪と競技会場をめぐっては、20年東京五輪のトライアスロン会場となった東京都港区も、水質改善に取り組んでいる。パリ市は今年5月、「泳げる水質」をどうすれば実現できるかヒントを得ようと、港区と協定を結んだ。(朝日新聞デジタル版)